九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

大和田建樹の『明治唱歌』における作詞についての一考察

佐藤, 慶治
九州大学大学院比較社会文化学府 : 博士後期課程三年

https://doi.org/10.15017/1903745

出版情報：九大日文. 29, pp.2-14, 2017-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

大和田建樹の『明治唱歌』における作詞についての一考察

佐藤慶治

一、導入と『小学唱歌集』の概説

本論文は、明治期の国文学者、詩人、作詞家である大和田建樹の作詞法と、大和田の編纂による唱歌集『明治唱歌』について、いくつかの視点から考察を行うものである。最初に、明治期の唱歌教育とその歌詞についての概説を纏めておきたい。

一八七二年、日本における近代教育の基礎である「学制」が公布された際に、小学校の一教科として「唱歌」が定められた。しかし、これは西洋の学校制度を模倣して定められただけのもので、資料や実際の指導者もなく、「学制」第二十七章では「当分之ヲ欠ク」という注付けがなされていた。そこで一八七九年に文部省は、西洋音楽の調査のため、東京音楽学校の前身である音楽取調掛を創設し、米国留学を終えたばかりの文部官僚、伊澤修二を御用掛（後に掛長）に任命する。伊澤は、米国留学時代に音楽の個人レッスンを受けていた米国の音楽教育学者ルーサー・ホワイティング・メーソンを音楽取調掛に講師として招聘し、一八八一年から一八八四年にかけて、最初の官製唱歌集である『小学唱歌集』全三編を編纂した。この唱歌集は、全三編において九十一曲の楽曲を掲載している。当時の日本においては西洋音楽形式で作曲できる者がほとんど存在していなかったため、そのうちの八十一曲が西洋楽曲の旋律に日本語の歌詞をつけて作られた「翻訳唱歌」と呼ばれる楽曲であり、『小学唱歌集』の場合、主に英米とドイツの民謡や賛美歌、更にはメーソンの編纂した児童用音楽教材集『国楽大系』の楽曲を原曲[1]としている。『小学唱歌集』における「翻訳唱歌」の歌詞に関しては、「音楽取調掛員たちが原曲の歌詞を翻訳し、次いで曲を分解して日本の伝統的な詩の形式に従って作詞しやすくした上で、分解した曲に合わせて歌詞の修正を加えた[2]」とされている。すなわち、翻訳と言っても必ずしも「言語間のテキスト訳出」ではなく、中には原曲歌詞と全く違った歌詞内容の唱歌さえあるが、「翻訳唱歌」と原曲の歌詞を比較分析してみると、賛美歌の歌詞における「神」という言葉が、大まかな歌詞ストーリーはそのままに、唱歌では「天皇」に置き換えられていたり、また、可愛らしい鳥（種類は明記されていない）を歌った西洋楽曲の歌詞が、「鶯」や「燕」のような季語を当てはめた唱歌歌詞に翻訳されるなど、日本の文脈に合わせた翻案が多くの楽曲において認められる。『小学唱歌集』の「翻訳唱歌」における翻案の例を一つ挙げたい。唱歌歌詞・原曲歌詞・原曲訳詞の順に記載する。

『小学唱歌集』第八八曲《祝え吾君を》[3]

一祝え吾君を、恵の重波、やしまにあふれ、普ねきはる風、
草木もなびく、祝え祝え、国のため、わがきみを
二祝え吾くにを、みずほのおしねは、野もせにみちて、白
かねこがね、花さき栄ゆ、　いわえいわえ、君の為め、
吾国を

"Song of the fatherland[(4)]"

1 Fatherland, rest in God`s own hand! When we speak thy
name so proudly, Ah, what magic in the spell! When we
hear thy worth praised loudly, Raptures then the bosom
swell. Thee, God`s arm shield from harm! Rest in his own
hand, dearest fatherland.

2 With sweet rest, may`st thou e`er be blest! Joy with thee can
flourish ever, Save upon the plains of peace; God to trust be
thy endeavor, Else prosperity must cease. God is near, thee
to cheer; Rest in his own Hand, dearest fatherland.

3 Justice` sway naught can lead astray; When it all our laws
protecteth,God is ready to befriend; And when truth our
minds directeth, Blessings on our acts attend.These pursue,
to God true; Rest in his own hand, dearest fatherland.

《父なる国の歌》

一父なる国、神の手で休め。我らは誇りを持ってそなたの
名前を言う、ああ、その何と魅力的な響き。我々はその
価値が大いに賞賛されるのを聴くとき、歓喜が胸の内で
高まる。神の手によって、そなたが害悪より守られんこ
とを。神の手で休め、敬愛する父なる国。
二甘い休息と共に、そなたも永遠なる祝福されるように。
そなたと共にある喜びは、永遠に栄える。平和な野を守
れ。神を信用することがそなたの努力であるように、そ
の他の幸福は必ず終わりがある。神はなんじの喜びの傍
におられる。神の手で休め、敬愛する父なる国。
三正義の道は、迷いとは無縁である。我々の法が全て守ら
れる時、神は困っている者を救うだろう。そして、真実
が我々の心を導く時、我々の行いは祝福を得る。これら
の求道は、神の真実へとつながる。神の手で休め、敬愛
する父なる国。

賛美歌である"Song of the fatherland"に対し、忠君愛国的な《祝え吾君を》の歌詞は、まさしくキリスト教で言うところの天の国における「神」を日本における「天皇」に置き換えて、歌詞を日本化したものである。「祝え」という言葉は、原曲にある「祝福」blest という単語の翻訳であると推察できる（祝福という単語が明治期にはまだ存在していなかった）。また、神や天皇の恩恵によってそれぞれの国が成り立っているという全体的な歌詞のストーリーも一致するものである。

『小学唱歌集』は、前書きで唱歌の目的を「徳性ヲ涵養スルヲ以テ要トスヘシ」と規定し、さらにその機能を「人心ヲ正シ

風化ヲ助クル」ことにあると位置付けている[5]。上記のように、『小学唱歌集』ではキリスト教の教義がうまく翻案され、日本の文脈に沿った形で歌詞の作成が行われている。これに関して音楽学者の中村理平は、原曲のキリスト教的要素が意図的に『小学唱歌集』に取り入れられたという説を唱えている。中村は『キリスト教と日本の洋楽』において、以下のように指摘を行う。

> 賛美歌には主に捧げる献身と愛、そして主から受ける許しと慰めが大きな部分を占めています。明治政府がこれに目をつけないわけがありません。日本での『主』は『主上』『大君』すなわち『天皇』にほかありません。神をあがめ神を敬う賛美歌の旋律と精神は歌詞を変えればそのまま天皇への帰依と服従、そして天皇からの慈悲を願う国民の魂の育成に通じる。[6]

すなわち、明治政府の役人としての音楽取調掛が意図的に翻案を駆使し、忠君愛国を中心とした国民形成という目的で唱歌を生み出したということだ。更に『小学唱歌集』の歌詞を分析してみると、儒教的な教訓を後付けたものも多いことがわかる。例として、現代の学校における卒業式でも歌われることがある《あおげば尊し》を挙げたい。以下に歌詞を記載する。

『小学唱歌集』第五十三曲《あおげば尊し》[7]

一あおげばとうとし、わが師の恩、教えの庭にも、はやいくとせ、おもへばいと疾し、このとし月、いまこそわかれめ、いざさらば
二互にむつみし、日ごろの恩、わかるさ後にも、やよわするな、身をたて名をあげ、やよはげめよ、いまこそわかれめ、いざさらば
三朝ゆうなれにし、まなびのまど、ほたるのともし火、つむ白雪、わするるまぞなき、ゆくとし月、今こそわかれめ、いざさらば

"Song for the Close of School[8]"

1 We part today to meet, perchance, Till God shall call us home; And from this room we wander forth, Alone, alone to roam. And friends we've known in childhood's days, May live but in the past, But in the realms of light and love, May we all meet at last.

2 Farewell old room, within thy walls, No more with joy we'll meet; Nor voices join in morning song, Nor ev'ning hymn repeat. But when in future years we dream, Of scenes of love and truth, Our fondest tho's will be of thee, The school-room of our youth.

3 Farewell to thee we loved so well, Farewell our schoolmates dear; The tie is rent that linked our souls, In happy union here. Our hands are clasped, our hearts are full, And tears

bedew each eye; Ah, ， tis a time for fond regrets, When school-mates say"Good Bye."

《卒業の歌》

一今日、我らは別れよう、おそらく神が我らを天に召してめぐり合うまで。私たちは教室を出でて、一人さまよう。幼馴染たちは、過去となり、過去の中で生き続ける。しかし、最期は光と愛の国で再会する。

二さらば古き教室よ、お前の中で楽しみ、皆と会うことはもうない。朝、声を揃えて歌うことも、夕べの賛美歌を繰り返すこともない。しかし、幾年も後の世、私たちは愛と真実の光景を夢見る。汝は最も大切な思い出になるだろう、私たちが若き日を過ごした教室は。

三さらば、私たちが愛した汝よ。さらば懐かしき級友たちよ。私たちの魂を結びつけた結び目は切れる、幸せの絆の結び目は。われらの手は固く握られ、胸にあふれ、目には涙がにじむ。ああ、これぞ別れの時、級友たちは別れを告げる。

原曲は、二〇一一年に英文学者の櫻井雅人によって発見された《卒業の歌》である。《あおげば尊し》という有名曲の原曲であるこの英語の歌は、永らく不明であり、唱歌研究における最大の謎とされてきた。《あおげば尊し》と同じく三連形式の楽曲であり、歌詞も卒業をテーマにしたものである。しかし、原曲の歌詞が単純に旧友や教室との別れを惜しむものであるのに対して、唱歌の歌詞は「師への恩」という儒教的教訓を後付けしていると言える。また、唱歌の第三番における「蛍」と「雪」の言葉は、『小学唱歌集』第二〇曲《蛍の光》でも引用されている「蛍雪の功」の故事に基づくものであるだろう。

『小学唱歌集』ではこのような形で唱歌歌詞が作られている。他にも例えば第三八曲《燕》のように、違う季節の季語を、季節を歌っていない原曲の歌詞に多く後付けして四季の移り変わりを表し、「日本的な自然」を歌った「翻訳唱歌」も多く存在する[9]。これについて言うと、例えばヴィヴァルディの《四季》などは各季節を全く違う旋律で表しており、同じ旋律で四季を歌う『小学唱歌集』の楽曲は、旋律と歌詞の調和という点で無理があると言えるだろう。

『小学唱歌集』は一八八四年の時点で全三編が刊行され、同年以降、各地の小学校で使用が開始されるが、一八八六年、前年に初代文部大臣となった森有礼が「第一次小学校令」を公布し、それまでの欧化主義の反動とも言える国家主義の勃興の下、教科書の検定制度が始まる。これは地方長官の裁量に任せていたそれまでの認可制とは違って、文部省自身が教科書の基準を定めるものであった。一八八六年に「教科用図書検定条例」が定められたが、翌年に廃止され、改めて「教科用図書検定規則」が公布された[10]。唱歌教育においても民間で編纂された唱歌集というものが出始める。大和田の『明治唱歌』は、唱歌教育における検定教科書として最初のものであり、後述するように、

特に歌詞の面で高い評価を受けている。大和田の作詞に関する研究としては、日本語学者の山東功によるものがある。山東は『唱歌と国語 明治近代化の装置』において、「唱歌における文法」をキーワードとして明治期を通じた唱歌教育の分析を行っており、唱歌の視点から近代化と日本語文法の繋がりを論じている。その中で山東は、大和田を、後述する「新体詩」の普及者として描いているが、本論文においては『明治唱歌』と『小学唱歌集』を比較することにより、「新体詩」以外の『明治唱歌』における作詞の特徴、すなわち『明治唱歌』が作詞の面で高い評価を受けている理由を導き出していきたい。

二、『明治唱歌』の概説

最初に大和田の経歴について概説しておく。大和田は一八五七年、伊予国宇和島市丸之内に、藩士の子として生まれた。幼少より藩校に学び、十四歳の時に藩公に召されて四書を進講するなど、早くも文学者としての萌芽をあらわしている。一八七六年、広島外国語学校に入学して英学を修め、一八七九年に上京。書記などとして働く傍ら研鑽をつみ、一八八四年より東京帝国大学古典講習科講師、一八八六年より東京高等師範学校教授等を歴任した。一八八八年より一八九二年にかけて、民間製唱歌集の先駆けである『明治唱歌』全六集を、奥好義と共に編纂する。一八九一年に職を辞してからは多彩な文筆活動に専念し、一九〇〇年より《鉄道唱歌》を発表し始める。晩年は、《海軍軍歌》などの作詞も行った。一九一〇年、東京牛込の法身寺で病死した。作詞を手がけた主な作品として、《故郷の空》、《青葉の笛》、《鉄道唱歌》などがある。

『明治唱歌』については、ほとんどの作詞が大和田によるものである。この中にはロバート・バーンズの Comin' Thro' the Rye の旋律を用いた《故郷の空》など、現在でもよく知られる楽曲が存在する。全一六九曲中一一四曲が西洋曲の旋律を基にしたものであり、ジルヒャーの《ローレライ》、モーツァルトの《春への憧れ》、ベートーヴェンの《マルモッテ》、ヴェルディのオペラ『リゴレット』より《女心の歌》など、現代日本でもよく知られているクラシック音楽の楽曲が多く原曲に含まれている。

『明治唱歌』第一集には「此書は学校と家庭とを問はず、世の唱歌を誘導して、高尚の域にすすめんとのぞむ熱心より、不完全の謗をうけんもかへりみず、稿を起したるなり」[11]という前書きがあり、メーソンの肖像画とメーソンへの謝辞も掲載されている。ここから、『明治唱歌』は『小学唱歌集』を参考として編纂され、それを踏み台として唱歌をさらに「高尚の域」に進めるという目的が内包されたものということが読み取れる。また、楽曲の音楽面について、「四分の四拍子の占める割合が最も高く、ハ長調とヘ長調が全体を通して多く見られ、短音階より長音階が優先されている」など、『小学唱歌集』との共通点が指摘されることもあり[12]、その点でも『明治唱歌』は『小学唱歌集』を参考にして編纂されたものと認められる。共編者の

奥は、音楽取調掛に在籍してメーソンに師事していたことから『小学唱歌集』の音楽的傾向が『明治唱歌』に受け継がれていたと推察される。

また、『明治唱歌』は歌詞だけを見ると大和田の創作詩集に近い。『明治唱歌』の歌詞を「忠君愛国」・「自然」・「儒教的教訓」・「その他(行事など)」という四つの基準で分類してみると、四分の一程度の楽曲が「自然」を歌った歌詞と言える。例えば「なるたけ簡単にて独習にやすき」第一集では二、三、四、五、二四、二五、二六の番号のものが「自然」をテーマにしており、『明治唱歌』と『小学唱歌集』との違いを示す参考として、以下にいくつか歌詞を掲載する。

第一集、第二曲《春の歌》

一歌へ歌へ春をむかへて。歌へ歌へ鳥とともに。いざや野も山も歌の声そへて、合はせその訓かへせこだま。空ものどか花もさかり。歌へ歌へ鳥よともよ。

二あそべあそべ野辺の芝生に。あそべあそべ蝶とともに。袖にちる露もけさは心地よや。袖にふく風もけふはうれし。春よ友よこころゆたかに、われとあそべ歌へ。

第一集、第三曲《鳥の歌》

一朝霧はれてさす日のかげ、むかへて親子そらに翔る。たのしさいつもかはらぬ声。歌へや遊べやなつかし鳥よ。

二あるひは雲につばさをのべ、あるひは森にねぐらをとひ、こゝろのまゝに憂もなし。歌へや遊べやむれゆく鳥よ。

第一集、第四曲《春風》

一草葉にふけやはるのかぜ、ひばりの夢をさますまで。菜種のうへをとぶてふの、つかれし羽ねに触れぬほど。

二こずゑにふけやはるのかぜ、花のにほひをさそふまで。枝さしかはすあをやぎの糸のもつれを見せぬほど。

三ああ愛らしのはるかぜよ、わが身をふきていつまでも、老せぬ空にまひあそべ。若き野山にゆたかよへ。

第一集、第二四曲《朝雲雀》

一霞にあがれりあはれ朝雲雀。菫のねぐらを早くおきはなれ、むらさき深きそらに、そのうたかをりわたる。

二雲井になのれりあはれ時鳥。深山の木の間をあとに立ちいでて、月かげきよきそらに、そのこゑひびきわたる。

三門田におちたりあはれ天つ雁。かさなる海山とほく飛びこえて、うす霧かかるかたに、そのかげいまぞしづむ。

四波間に操げりあはれ小夜千鳥。ねざめの枕をよそにとひすてて、潮風さむきはまにその友ゆききあそぶ。

『小学唱歌集』と比較した『明治唱歌』の傾向として、全体的に美感を重視した教科書と言える。題名に「春」を含む第二・四曲には、「蝶」、「ひばり」、「春風」などの季語が存在するが、季節の移り変わりは見られず、それは全六集を通じて同じ傾向

が続く。すなわち、『小学唱歌集』で見られるような「違う季節の季語を同一楽曲歌詞内で多用して四季の移り変わりを表す」という作詞法は『明治唱歌』にはなく、それが「歌曲の調和がよろしく、ながらく歓迎された良書」[13]という評価につながったと考えられる。また、「忠君愛国的」な歌詞の楽曲について見てみると、四分の一以上の楽曲がそこに当てはまる『小学唱歌集』とは違い、『明治唱歌』では第一集第一四曲《皇国の守》など百六十九曲中十一曲（一―一三、一―一四、一―二〇、一―二八、二―一〇、四―一三、四―一六、四―二三、四―二四、五―二五、六―一四〔数字は巻数―曲番号〕）しかそこに当てはまらない。この点で『明治唱歌』は、「歌詞に思想的なくさみがなく、現在（一九六五年）見ても好感のもてる教科書」[14]であると評される。

三、『明治唱歌』における「翻訳唱歌」

更に『明治唱歌』の歌詞について重要なことは、第二集の「凡例」で「西洋唱歌の原譜に附けたる歌は、すべて作者のあらたに設けたる題にて、原歌を翻訳したるものは一つもなし」と記述されているように、ほとんどの楽曲が原曲の歌詞と全く関係なく作られていることである。例えばベートーヴェンの《マルモッテ》は、ゲーテの戯曲からテキストがとられ、マーモットを使った芸を披露する旅芸人の少年を描いた歌詞内容であるが、それを原曲とする第五集の第一三曲《あすの日和》は秋の夕暮れを歌った歌詞内容に改変された。しかし第一集には原曲歌詞を参考にして作られたと思われる楽曲が複数存在する。これは、「翻訳でない」第二集以降を編纂する前に西洋唱歌の詩の型を自らの作風に取り入れるための、試験的な作品だったと見なすこともできる。本論文の主目的は、「翻訳唱歌」を中心に編纂された『小学唱歌集』と『明治唱歌』の比較であるため、『明治唱歌』における「翻訳唱歌」の歌詞についても、以下にいくつか原曲との比較の形で記載してみる。

第一集、第六曲《遊歩の庭》

一いでよいでよ遊歩の庭に。休のかねのおときく時は、皆うちつれておくれずいでよ。楽しく共に遊べ遊べあそべ。

二あそべあそべ中よく遊べ。鈴菜の花にとまりしてふも、友だちつれて空にぞあそぶ。楽しく共に遊べ遊べあそべ。

"March Away"[15]

1 March away! March away! To the play ground lead the way;
All our lessons now are past, Left foot first and not too fast;
O! 'tis nice each sunny day, Thus t'enjoy Ourselves in play;
We'll no angry looks betray, But merrily merrily march away.

2 Off we go! Off we go! All our looks our pleasure show;
Round and round the pole we swing, Or we form the joyous ring; Joining in the active race, Swift we run from place to place; 'Tis the time for sport and play, So merrily, merrily

march away.

《進み出よう》

一進み出よう、進み出よう、遊び場へと道をつなごう。今、全ての授業は終わった。左足から最初に、急ぎすぎぬよう。おお、なんていい天気だろう。遊ぶのに恰好だ。私たちは怒らないし裏切らない。でも、喜んで進み出よう。

二私たちは行く、私たちは行く、皆とても嬉しそうに見える。ポールをまわりスイングし、または楽しく輪を作る。活発な競走に参加し、すばやく動く。スポーツと遊びの時間。喜んで、喜んで進み出よう。

唱歌の作詞者は大和田であり、連の数も原曲と一致し、ほとんど直訳に近いと言ってよい。休み時間に子供たちが遊ぶ様子が描かれている。「鈴菜の花にとまりしてふ」という部分は大和田の後付けであり、「すずな」・「蝶」という二つの季語が含まれているが、それぞれ新年と春の季語であり、特に季節の移り変わりを気にして付けているわけではないようである。

第一集 第一五曲《母なき吾屋》

一ははなきわがやは暗ゆくここち。のこれる幼兒目も泣きはれぬ。ちちうへあねぎみ何とかすべき。母なきわがや暗ゆくここち。

二ははなきわがやは暗ゆくここち。春日の光もここには照らず。鳥啼き花散りなつさへとはず。母なきわがやは暗ゆくここち。

三ははなきわがやは暗ゆくここち。朝夕むかひしつくゑのうへに。つもれるその書たれとか読まん。母なきわがやは暗ゆくここち。

四母なきわがやはやみゆくここち。なれたる言葉を耳にも聞かず。われらを遺していづこに行きし。母なきわがやは暗ゆくここち。

"HOME IS SAD WITHOUT A MOTHER.[16]"

1 Home is sad without a mother, Gloom and darkness hover there; Eyes of childhood wet with weeping, Speak of darkness and despair. Kiss me sister, love me brother, Home is sad without a mother. Kiss me sister, love me brother, Home is sad without a mother.

2 Home is sad without a mother, Mould`ring yonder in the tomb; Hands we often felt caressing, Silken curls of childhood`s bloom. Kiss me sister, love me brother, Home is sad without a mother. Kiss me sister, love me brother, Home is sad without a mother.

3 Home is sad without a mother, Vacant is the old armchair; Lips of love are cold and silent, Silent in the churchyard there. Kiss me sister, love me brother, Home is sad without a mother. Kiss me sister, love me brother, Home is sad without a mother.

4 Home is sad without a mother, Up there in the spiritland,
Father, mother, sister, brother, Form a circle, hand in hand.
Kiss me sister, love me brother, Home is sad without a
mother. Kiss me sister, love me brother, Home is sad
without a mother.

《母亡き悲しい我が家》

一我が家は母を亡くして悲しみにつつまれている。憂鬱と陰鬱が漂う。子供らの目は涙に濡れ、陰鬱と絶望の話をする。姉よ、キスして、兄よ、愛して。我が家は母を亡くして悲しみにつつまれている。姉よ、キスして、兄よ、愛して。我が家は母を亡くして悲しみにつつまれている。

二我が家は母を亡くして悲しみにつつまれている。まるで墓の中のよう。私たちはしばしばキスをし合う。子供たちの頬や髪に。姉よ、キスして、兄よ、愛して。我が家は母を亡くして悲しみにつつまれている。姉よ、キスして、兄よ、愛して。我が家は母を亡くして悲しみにつつまれている。

三我が家は母を亡くして悲しみにつつまれている。母の古いひじかけ椅子は誰も使っていない。愛にあふれた唇は、教会の墓地で冷たく静まり返っている。姉よ、キスして、兄よ、愛して。我が家は母を亡くして悲しみにつつまれている。姉よ、キスして、兄よ、愛して。我が家は母を亡くして悲しみにつつまれている。

四我が家は母を亡くして悲しみにつつまれている。精霊の国で、父・母・姉・兄たちと手をとり抱き合おう。姉よ、キスして、兄よ、愛して。我が家は母を亡くして悲しみにつつまれている。姉よ、キスして、兄よ、愛して。我が家は母を亡くして悲しみにつつまれている。

これも大和田の作詞による唱歌であり、細部は原曲と異なるものの、連の数が一致し、全体的なテーマとしては原曲と唱歌でほとんど類似したものが見られる。タイトルについては完全に直訳である。原曲の「椅子」が、唱歌で「机」に変更されているのは一種の翻案であり、当時の日本の一般大衆が、椅子に馴染みのなかったということが改変の理由として大きいだろう。『小学唱歌集』の場合だと「親」をテーマにした歌詞は、全て「親の恩」という儒教的道徳の下に形成されているが、《母なき吾屋》の場合は「母を失った悲しみの情景」が前面に出され、教訓的な歌詞とは言えない。

第一集、第二六曲《二月の海路》

一春のうららの海原や、遠の山々かすむなり。雲か帆影かみづとりの、むれてとぶさへおもしろや。

二闇の雲間の星のかげ、光かくれてすごき夜や。やがて嵐かおろしこん、空のけはひもただならず。

三雨にあらしに大海は、怒涛さかまきあるるなり。いまやわが船かくれ岩に、ふれてくだけんおそろしや。

四いづこなるらん名もしらぬ、はなれ小島に流れつき、あらしふきやみ春の夜は、しほぢかすみてあけそめぬ。

"Die Lorelei[17] "

1 Ich weiß nicht, was soll es bedeuten, Dass ich so traurig bin?
Ein Märchen aus alten Zeiten, Das kommt mir nicht aus dem Sinn. Die Luft ist kühl und es dunkelt, Und ruhig fließt der Rhein; Der Gipfel desBerges funkelt im Abendsonnenschein.
2 Die schönste Jungfrau sitzet, Dort oben wunderbar, Ihr gold'nes Geschmeide blitzet, Sie kämmt ihr goldenes Haar.
Sie kämmt es mit goldenem Kamme, Und singt ein Lied dabei; Das hat eine wundersame, Gewalt'ge Melodei.
3 Den Schiffer im kleinen Schiffe, Ergreift es mit wildem Weh,
Er schaut nicht die Felsenriffe, Er schaut nur hinauf in die Höh'. Ich glaube, die Wellen verschlingen Am Ende Schiffer und Kahn, Und das hat mit ihrem Singen, Die Loreley getan.

《ローレライ》

一なぜこんなに悲しいのか、私にはわからない。遠い昔の物語、胸からいつも離れない。風は冷たく暗くなり、ライン河は静かに流るる。山の頂上は、紅く夕日に照り映えている。

二遠くの岩に、驚嘆すべき美しい乙女が腰をおろす。金のかざりを輝かせ、黄金の髪を梳いている。黄金の櫛で梳きながら、乙女は歌を口ずさんでいる。不思議な力を持った素晴らしい旋律。

三小舟をあやつる舟人は、心をたちまち乱され、暗礁も見ることができず、ただ上ばかりを仰ぎみる。ついに、舟も舟人も波に呑まれてしまうだろう。ローレライの妖しき魔の歌によって。

唱歌の作詞は音楽取調掛にも在籍していた鳥居忱によるものであり原曲はジルヒャーの有名なドイツ歌曲《ローレライ》である。大和田の作詞ではないが、『明治唱歌』における作詞の傾向を知るという点で、この楽曲も取り上げた。原曲第三番の「舟も舟人も波に呑まれてしまう」という歌詞を取り出して拡大することにより、「春の海原に漕ぎ出した船と舟人が、嵐にあってあやうく沈みそうになる」というストーリーを作り出している。このような、原曲の歌詞の一部を取り出して拡大するという翻案は、『小学唱歌集』でも多く見られる。しかし、「忠君愛国」や「儒教的教訓」、「季語」などの、『小学唱歌集』で見られるような後付けの要素は含まれていない。

このように『明治唱歌』第一集から、三曲のみの分析ではあるが、そこからは『明治唱歌』における歌詞翻案の特徴として、『小学唱歌集』のように日本的な教育要素の後付けをほとんど行っていないことがわかる。余計な内容を含めず曲調と合った歌詞を楽曲につけるということは、なるほど単純なことではあるが、これも大和田の言う「高尚の域」に通じる要素であろう。

この他にも、末日聖徒イエスキリスト教会（モルモン教）の賛美歌 God Speed the Right を原曲にしている[18]大和田作詞の第二九曲《クリストマスの歌》などがあるが、この唱歌は必ずしも原曲歌詞内容と関連性がない。しかし、この楽曲で画期的なことは、「クリスマス」というキリスト教の儀式をテーマとして用い、「天地にみちたる神の恩。やみにもかくれぬ神の恩。みそらの星とぞわれらを照らす。うれしや神の恩」と、エホバを讃える内容をそのまま歌詞にしていることである。これは『小学唱歌集』においては有り得ないことであった。大和田はクリスチャンではなかったものの、学生時代に宣教師の聖書講義を受講しており、かなりのキリスト教理解者であったとされる。[19]

四、大和田と「新体詩」

大和田の功績としては、「新体詩」の概念を唱歌に取り入れたことを記しておかねばならない。そもそも新体詩とは、明治時代に西洋詩の影響を受けて、それまでの日本の和歌・俳句などの定型詩や漢詩から新しい詩型を目指した詩作品のことである。この「新体詩」は一八八二年に刊行された『新体詩抄』（矢田部良吉、外山正一、井上哲次郎による共編）で広く知られ、北村透谷、島崎藤村らの詩人に影響を与えた。この詩集では「翻訳」が作詩の中心的な方法であり、西洋の韻律を持ち込むために七五調が採用されている。そこではシェイクスピアのハムレット王子による有名な台詞、"To be or not to be, that is the question" が、「ながらふべきか但し又 ながらふべきに非ずるか 爰が思案のしどころぞ」・「死ぬるが増か生くるが増か 思案をするはここぞかし」という二つの翻訳で掲載されており、これは新しい「日本語文体の確立」の可能性を探るものと見なされている。[20]

大和田は一八九四年刊行の『欧米名家詩集』における七五調によって、文学界の中で模範的な詩形の作家と認められるようになるが、その七五調は様々な試行錯誤の成果であった。大和田は唱歌詩形に関して、一八九四年に刊行された「明治文学史」において、『新体詩抄』と『小学唱歌集』を比較し、「前者（『新体詩抄』のこと）は謂はゆるポエムを起さんとするものにて用語は通俗平易を主とし。後者（『小学唱歌集』のこと）は謂はゆるソングの手本にして語気往々古調死格に傾けり。是れ其大なる差別なり」[21]と論じ、『小学唱歌集』の詩形を酷評する。古調死格に傾く唱歌教育に対して大和田が示したのが『明治唱歌』であり、そこでは前述したものも含めて様々な句格が試されている。例えば、「夕空はれてあきかぜふき、つきかげ落ちて鈴虫なく」と歌われる《故郷の空》の句格は七六調であり、これは当時としては斬新なものであった。このような様々な試みを経て、新体詩は結局七五調に落ち着く。山東は、この「七五調への落ち着きへの一要因が、記憶の装置へと変化した後の『唱歌』であった」[22]述べている。大和田の作詞で有名な《鉄道唱歌》は、旋律の力によって歌詞を暗記させるという装置的要素の強いものである。すなわち新体詩の「詩形として七五調が選択される

ということは、唱歌の側から見れば音楽性の涵養とは別に歌いやすさが要求されたということにもなり、結果としてそれらは共役的に機能した」のである。この七五調のリズムは、歌詞を調子よく唱えるのに適しており、歌詞内容で人々を感化しやすいため、後々の文部省による唱歌作成にも活かされていった。

五、終わりに

以上、本論文においては「高尚の域」という言葉を手がかりとして、『明治唱歌』における大和田の作詞について考察を行った。結論として言えば、「高尚の域」とは官製の『小学唱歌集』とは異なる作詞方法、すなわち「違う季節の季語を同一楽曲歌詞内で多用して四季の移り変わりを表すことをしない」、「忠君愛国的な歌詞の割合を減らす」、「原曲歌詞を翻訳する場合でも、無理やり日本的な要素を入れない」、「新体詩に基づいた作詞を行う」ことなどが関係するものであった。このような、『明治唱歌』で実践された大和田の作詞法は、以降の唱歌教育における作詞に大きな影響を与えており、文部省が一九一一年より一九一四年にかけて編纂を行った『尋常小学唱歌』においても、共通する作詞法を見ることが出来る。

【注記】

1 『小学唱歌集』の原曲情報については、安田寛、ヘルマン・ゴチェフスキ、櫻井雅人『仰げば尊し―幻の原曲発見と「小学唱歌集」全軌跡』（東京堂出版 2015）pp.310-360.を参照した。

2 山住正巳『唱歌教育成立過程の研究』（東京大学出版会、1967）pp.81-83.

3 伊澤修二著、山住正巳校注『洋楽事始』（平凡社、1971）p. 270

4 L. W. Mason, Third Music Reader（Boston: Ginn Brothers, 1871）pp.32-33.以下、本論文における英語歌詞・ドイツ語歌詞の訳出は全て筆者による。

5 『洋楽事始』p.161

6 中村理平『キリスト教と日本の洋楽』（大空社、1996）pp.571-575.

7 『洋楽事始』p.224

8 H.S.Perkins, ed., The Song Echo: A Collection of Copyright Songs, Duets, Trios, and Sacred Pieces, Suitable for Public Schools, Juvenile Classes, Seminaries, and the Home Circle（New York: J. L. Peters, 1871）p. 141

9 ただしこれについては旋律と歌詞内容が合わなくなるため、教育雑誌等で批判も受けていた。詳しくは、拙稿「明治期の唱歌歌詞における『日本の美』―季語とナショナル・アイデンテンティー」『総合文化学論輯第二号』（総合文化学研究所、2015）を参照されたし。

10 松村直行『童謡・唱歌でたどる音楽教科書のあゆみ 明治・大正・昭和初中期』（和泉書院、2011）p. 145

11 大和田健樹、奥好義共編『明治唱歌第一集第六集』（中央堂、1888-1892）より。以下、楽曲の出典も同書籍から。

12 山田めぐみ『小学唱歌集』（明治15年～明治17年）との比較における『明治唱歌』（明治21年～明治25年）の特徴に関する一考察」『教育学研究紀要第60巻』（中国四国教育学会、2014）p.466

13 田村虎蔵先生記念刊行会編『音楽教育の思潮と研究』（大空社、1992）p.103

14 海後宗臣『日本教科書大系近代編第二十五巻 唱歌』(講談社、1965）p.641

15 D.Caughie eds., The Glasgow Infant School Magazine, 1st series
（London：Darson & Co., 1860）pp.31-32. 原曲情報は、「斉藤基彦のホームページ：明治唱歌」http://www.geocities.jp/saitohmoto/hobby/music/meijishokal/meijishokal.html#106 より。斉藤は、英文学者の櫻井雅人（《仰げば尊し》原曲の発見者）との私信で情報を得たという注付けをしている。

16 H.S.Perkins, ed., The Song Echo：A Collection of Copyright Songs, Duets, Trios,and Sacred Pieces, Suitable for Public Schools, Juvenile Classes, Seminaries,and the Home Circle（New York: J. L. Peters, 1871）p.99 原曲情報は、「斉藤基彦のホームページ：明治唱歌」より。

17 http://www1.cpdl.org/wiki/index.php/Die_Loreley_
（Friedrich_Silcher）2016.8.14.テキスト取得

18 原曲情報は、「斉藤基彦のホームページ：明治唱歌」より。

19 手代木俊一「〈真白き富士の根〉と讃美歌（2）―大和田建樹・三角錫子とキリスト教：小さな教会としての〈ホーム〉―」『フェリス女学院大学音楽学部紀　要第2号』（フェリス女学院大学、1997）pp.50-52.

20 井口正俊「新体詩・唱歌・賛美歌、近代日本成立期における『翻訳』文化の一段面」『神と近代日本 キリスト教の受容と変容』（九州大学出版会、2005）pp.187-197. を参照した。

21 大和田建樹『明治文学史』（日本図書センター、1982）p.185

22 山東功『唱歌と国語 明治近代化の装置』（講談社、2008）pp.147-155.

【付記】本論文は、（公財）花王芸術・科学財団の平成二八年度音楽研究助成を得て執筆を行ったものである。

（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年）